

令和7年度

自己点検・評価書

(学校評価報告書)

附属高等学校天王寺校舎

1 附属高等学校天王寺校舎の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

(2) 所在地

大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員480人(1学級40人)

(4) 幼児・児童・生徒数

475人(男子229人・女子246人) (令和6年4月1日現在)

(5) 教職員数

校長(併任)1人、副校長1人、主幹教諭1人、教諭28人(うち、臨時的雇用6人、育児休業1人、再雇用職員1人)、非常勤講師9人

事務職員3人(専任1人、事務補佐員2人)、臨時用務員(用務員)2人

2 附属高等学校天王寺校舎の特徴

本校は、開校以来附属天王寺中学校とともに6年一貫教育の研究、実践を続けてきた。また、令和5年度より第3期のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、現在はその成果を発揮しながら教育研究を継続している。

生徒の自主性を重んじ、多様な経験と活発な議論を通じて、時代を問わず通用する生きる力と、自律的に責任を持って行動する力を育てることを目指している。

3 附属高等学校天王寺校舎の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となって、教育の理論と実際に関する研究を行うこと。
- (2) 本学の教育実習機関として、実習生を随時受け入れ、適切な指導を行うこと。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てること。
- (4) 本学が行う現職教員の再教育の一端を担うこと。

4 附属高等学校天王寺校舎の学校教育目標

- 正義を愛し、真理を追求する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。
- 強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。
- 他人を愛し、自然の恵みに心寄せせる豊かな感性を育てる。
- 社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。

5 附属高等学校天王寺校舎の学校教育計画

1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。
2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取り組みを行う。
3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

6 附属高等学校天王寺校舎令和6年度重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
1) 互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、「協働」を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	中高で各教科の授業内容などと連携した研修を開催し、教員一人ひとりの生徒対応力の向上や学校安全に対する意識の向上に努める。<健康・人権教育>	中高で救急救命講習を実施する中で、消防署の支援などを通じて、AEDの使用を含めた実践的運用の確認が実施できた。訓練や教科の授業を通じて、教員も含めて学校安全に対する意識の向上を図ることができた。	防犯や消防などの訓練についてややステレオタイプ化した訓練の身になっている現状がある。授業以外や人が不足しているときの危機対応の実践的対応を確認する機会を中高連携して実施していきたい。	B		A	
	討論活動、発表活動とそれに至る話し合いや意見交流の機会を担保し、教科の内外で、個人が様々な学びを得ることのできる学習集団を育てる。<国語科>	生徒同士で学習課題を設定する機会を設け、課題の立て方や論点の整理、説明の仕方を互いに学び合う場面が増えた。その結果、個々の生徒が多様な役割を通して学びを深める学習集団としての基盤が形成された。また、意見の違いを否定ではなく問いとして扱う姿勢が育ちつつあり、学習内容を「自分ごと」として捉え、他者の考えに触れることで理解を更新する学びが一定程度実現できた。	討論・発表活動の充実に向けては、話し合いの質に個人差が残った。合意形成を急ぐあまり根拠の吟味が浅くなる場面も見られた。生徒同士で学習課題を設定する活動においても、課題が抽象的になりやすい、あるいは「すぐ答えが出る問い」に収束してしまうなど、問いの精度を高める支援が必要である。	B		A	

<p>社会に主体的に参画できる公民的資質を持った生徒を育成することを目標とし、生徒が能動的に取り組める協働的な活動を通じて、生徒自らが課題を発見し、事実に基づいて論理的に考察・表現できるような授業を実践する。〈社会科〉</p>	<p>協働的な活動を通して、生徒は社会の課題を自ら発見し、事実を根拠に多面的・多角的に考察する力を身に付けた。また、自分の考えを論理的に表現しようとする姿勢が育ち、社会に主体的に参画しようとする公民的資質の向上が見られた。</p>	<p>課題設定の段階でより一層生徒の主体性を引き出す工夫を重ねるとともに、根拠に基づいて考察・表現する力をさらに高められるよう、指導方法の改善に努めていきたい。</p>	A		A	
<p>実験や観察を通して、「協働する能力」や「科学的に探究する力」を伸ばすための授業実践に取り組む。実験では、予め決められた手順通り実験を行うのではなく、準備物や実験操作などを自分達で考えて、主体的に実験に取り組む授業を目指す。〈理科〉</p>	<p>中高のそれぞれの理科実験において、主体的に取り組む実験を行う機会を設けることができた。一方で、「協働する能力」や「科学的に探究する力」を評価する場面は数多く設けることができず、ただ主体的に取り組ませただけといった形式になることもあった。</p>	<p>主体的に取り組ませた実験により、生徒の「協働する能力」や「科学的に探究する力」がどのように向上したのかを評価する必要がある。</p>	B		A	
<p>課題解決的な学習・授業を進める中で、協働しながら個々人の技術向上に繋がる指導を行う。ルールや練習方法など自分たちで調べ、実践していく中で自他を尊重する態度を養う。〈保健体育科〉</p>	<p>ルールや効果的な練習方法について自ら調べ、実践と振り返りを繰り返す過程を設定したことで、主体的に学ぶ姿勢が見られた。活動を通して、仲間の考えや技能を尊重し合う態度も育まれ、自他を大切にしながら学び合う姿が確認できた。</p>	<p>課題解決的な学習を通して一定の成果は見られたものの、協働の質には差が見られた。話し合いが形式的になった班や、意見を出す生徒が固定化する場面もあり、全員が主体的に関わるための手立てには改善の余地がある。</p>	A	改善点の内容から、自己評価Aは少し高いかと思いました	A	次年度以降、自己評価に関しては全体に適正になるように周知する。
<p>アンサンブルの機会を多く取り入れ、音楽表現を創意工夫する一連の過程を通して、個の音楽技能をさらに高めるとともに、「チームで働く力」を育む授業を展開する。〈音楽科〉</p>	<p>アンサンブルはまさに探究的な学びそのものである。音や音楽についての興味や関心を高め、音と音を通した「対話」を軸に、生徒の創造性や感性を育む授業づくりに取り組んだ。</p>	<p>限られた授業時間の中で、自己表現するために必要な音楽技能をどのように育んでいけばよいのか検討していく。</p>	A		A	
<p>生徒が主体的に判断して、学習過程において個別最適な学びと協働的な学びを往還することより、生徒一人ひとりが「生きた知識・技能」を身に付けられるような授業実践〈英語科〉</p>	<p>協働的な学びに繋がる学びを恣意的に行事として入れ個々の学習が生きた知識と繋がるように提示し、良い成果が現れた。成績における知識・技能/思考・判断・表現/主体性の3つに分けて本校独自の評価シートの活用をすることができた。(高)</p>	<p>今年度実施するした「ホンモノ」体験と教科を結び付けた行事を次年度以降も系統的に引継ぎ、協働的な学びをより一層促していきたい。(高)</p>	A		A	

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取り組みを行う。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
1) 生徒の将来の目標と生徒を取り巻く社会の状況も含めた進路についての意識を深めさせ、その実現に向けた支援を行う。	校務支援システムの円滑で安定した運用をはかるとともに、小中高間の進路用データの円滑な引継ぎを進路指導担当と連携を図りながら支援する。(中)(高)昨年度に改訂された教務規定の適切な運用について、各教科を支援する。<教務部>	校務支援システムを安定して運用することができた。記された観点別評価をはじめ、教務規定の適切な運用について、各教科を支援することができた。	本校の現状や社会的な要請に答えられるよう、教務規定の見直しについて検討する必要がある。	A	保護者からはよく見えない項目のため	A	
	各学年で完結させていた取り組みを進路部内で共有し教員間の縦の繋がりを強める。また、生徒への情報共有を精査するとともに情報が漏れることのないように体制を整える。<進路指導部>	生徒への情報共有については3学年とも徹底できた。また、各学年や全学年に関わる奨学金についてははっきり共有できた。部内の縦の繋がりについては、3年が年間通して進路関係で動いているにも関わらず共有できていないことがあった。	3年生での進路指導部の動きが多すぎるので、共有するのに限界があるように感じる。いつ何を行ったかくらいは部内で発信してもよかったと考えている。	A		B	
	CAN-DOリストとパフォーマンス課題のつながりについて生徒への明確な提示及び年度末アンケートによる生徒たち自身の達成状況のふり返りの検証<英語科>	4月にリストを配付し、パフォーマンス課題がどの項目と関連しているのかを示して実施した。生徒の年間での達成度を確認するための振り返りアンケートを2月に実施し、分析を行った。	年度の最初に、シラバスと共にCAN-DOリストを示し、年度末に振り返らせた事は生徒にとっても自分たちの成長を実感できる機会となり良かったが、各学期のパフォーマンス課題の時にも提示し意識づけできればなお良いと感じた。	B		A	
2) 生徒と教員が協働して健康と安全を意識した教育環境の整備を図る。	学校に内在する防犯、災害リスクに対して、生徒・教職員がその要因を共有し、予防的行動を適切に行えるよう、本校の災害リスクや地域リスクに対応したマニュアルの改定を行っていく。生徒・教員の減災・防犯意識を高められる安全教育について各教	訓練などを通して危機管理の体制を再確認することができた。可能な限り、本校が直面している災害面でのリスクについて、生徒自身が自ら気づいて自助・共助・公助の視点から実践的訓練に取り組むことができた。	年2回の危機管理訓練は、基礎的確認事項が中心で、シナリオの固定化が懸念される。3年間(6年間)を意識した実践的な(イレギュラー要素も含んだ)訓練を体系的に取り組む必要がある。また、変化する危機管理状況に対応した	A	夏場の熱中症対策をもっと真剣に考えてほしい。救急車を呼べば終わりではない。その後その生徒は生死を彷徨うこと	A	日常の活動については熱中症対策マニュアル等に従い、注意しながら実施する。体育館へのエアコン設置に向け

	<p>科と連携を取りながら積極的に取り組む。＜健康・人権教育＞</p>		<p>マニュアル改定を消防・警察署、大学の先生などのご助言をいただきながら実践的なものに改定していく。</p>	<p>もあり、後遺症が出ることもある。人の人生を左右すること、人の命がかかっているということ、もっと真剣に考え対策してほしい。死人が出てからでは遅いです。散々学校に多数の保護者が伝えているが全く改善されず、いつ我が子がそのような目にあうかと思うと、安心して学校に通わせることができない。</p>	<p>て動き出している。</p>
	<p>授業を行う前後における運動の場の安全確認は当然だが、授業中も生徒がお互いに健康チェックを行う制度を構築する。＜保健体育科＞</p>	<p>授業前後における運動環境の安全確認を徹底するとともに、活動前には体調や既往のけがの有無を確認し、活動中も適宜声を掛け合うことで、体調変化に早期に気付く場面が見られた。また、仲間の様子を気に掛ける態度が育ち、安心して活動できる雰囲気づくりにもつながった。</p>	<p>健康チェックの制度は機能したものの、確認が形式的になる場面も見られた。特に活動に集中するあまり、声かけが十分でない時間帯もあったため、チェックのタイミングや方法をより明確にする必要がある。予算の都合上、テニスコートの補修工事の要望が通らなかった。来年度も引き続き申請していく。</p>	<p>B</p> <p>改善点の最後「予算の都合上～」については、取組内容に記載されていない項目であるとともに、自己評価としても不要な内容かと思います。</p>	<p>A</p> <p>教科に意見を伝えます。</p>

	生徒が安心して音楽活動に取り組むことができるよう、生徒と教員が協働し、音楽を奏でる空間(音楽室・音楽棟)の環境整備をすすめる。<音楽科>	音楽施設を使用する全ての生徒に対し、清潔かつ整った環境で音楽を奏でることができるよう意識づけをおこなった。また2学期より、授業場所が音楽室と大学中央館ミレニアムホールとなった影響もあり、楽器の置き場所の変更や音楽を主体的に学ぶための環境整備をおこなった。	本校の音楽施設には楽器庫がなく、楽器を安全に保管する場所がない状況が続いている。引き続きこの状況の改善を具申し、生徒たちが安心して芸術活動ができる環境を整えていく。	B		A	
--	----------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------	---	--	---	--

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せせる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
1)最近の学力観をふまえて、 <u>つつカリキュラムマネジメントを実施しながら各教員と学校全体の教科指導力を高める。</u> また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探るとともに、教科横断的な視点での指導実践を蓄積、発信する。	ロイノートや GoogleWorkspAce といった授業支援ツールの運用や運用支援、GIGA端末や BYOD 端末の運用支援を図り、ICT を活用した授業実践の支援を行う。(中)(高)授業における ICT 活用の現状についての調査を続け、その結果をもとに ICT を有効に活用した授業実践について検討する。(中)次期 GIGA端末について有効な活用ができるよう、納入運用について対応を行う。<教務部>	授業支援ツールの管理運用を行うとともに、生徒用端末の運営支援をはかり、授業環境を適切に担保することができた。(中)次期 GIGA端末導入に向けた環境構築や納入の対応を行うことができた。(高)授業における ICT 活用の現状に基づき、ICT を活用した授業実践を支援することができた。	(中)(高)ICT を活用した授業実践がより広がるような支援を適切に行う必要がある。	A	通っていた小学校の方が ICT の活用が進んでいて、様々な学びがあった。中高ではただ単にパソコンを使って資料作ったり、連絡事項が送られてきたりといった使い方が多く、今の時代それを ICT を活かした状態だとは到底思えない。	B	

<p>各種学校行事におけるICT活用を通して、生徒の主体性や協働性を育むとともに、情報活用能力を高める指導を行う。実践の記録を通じて課題と成果を明確化し、学習活動と連携した取り組みとして蓄積・発信していく。また、行事と教科を連携させられるようなカリキュラム・マネジメントを行う。〈生徒指導部〉</p>	<p>中学の学校行事、高校の自治会行事においてICTを活用し、生徒が企画立案・情報共有・成果発表を主体的に行う場面を設けることができた。これにより、生徒の主体性や協働性を育む機会を一定程度確保することができた。一方で、行事における実践内容の記録や成果・課題の整理については十分とはいえず、教科指導との関連を明確に意識した振り返りや共有までには至らなかった。</p>	<p>・行事におけるICT活用の成果と課題を記録する様式を整備し、教科との関連を明確に整理する仕組みを構築する。 ・行事で育成を目指した資質・能力を、各教科の年間指導計画と照らし合わせて検討し、接続を意識した振り返りの場を設ける。 ・実践を単発で終わらせず、校内研究や教育実習とも関連付けながら、学校全体の指導力向上につなげる。</p>	B		A	
<p>教育研究会での発表内容の充実を図るために教員研修を行い、指導実践を蓄積し、校外へ発信する。特に今年度(令和7年度)より認知科学を取り入れ三ヵ年計画を立てて研修を充実させる。〈研究部〉</p>	<p>自由研究の発表に加えて、教員のポスター発表を実施し授業者以外の教員の研究の場を設けた。また、府内の中高へ校内研修の呼びかけを行い、地域にもともに学べる研修を立案した。</p>	<p>ポスター発表の充実と日常的な関わりを持つとよりよくなる。</p>	A		A	
<p>GIGA端末を活用したプレゼンテーションの作成やレポート執筆の活動を行いながら、手書きのポスターや絵本作成等の活動を設定することで、生徒が多様な媒体における表現形式の違いを実感する機会を確保する。〈国語科〉</p>	<p>写真を用いた俳句の創作活動や、漫画の表現技法を分析してGIGA端末を用いてレポートにまとめる活動などを通して、生徒が言語・視覚・構成といった要素の関係を意識しながら表現に取り組む機会を確保した。これらの実践を通して、生徒はデジタル媒体における編集・構成のしやすさや情報整理の利点と、手書きによる表現がもつ即時性や感覚的な伝わり方の違いを実感し、目的や相手に応じて表現手段を選択する意識を高めることができた。</p>	<p>今後は、デジタルとアナログそれぞれの表現の特性を比較・整理する振り返り活動を充実させるとともに、評価規準を明確化し、「何を、どのような媒体で表現するのが適切か」を判断する力の育成を図りたい。</p>	B		A	
<p>各授業において、積極的に教科横断的な視点を持った授業を実践し、中高社会科の部会で情報を共有したうえで、カリキュラム全体の上での社会科の意義について中高社会科で議論を行い、認識を深める。〈社会科〉</p>	<p>教科横断的な授業実践と中高社会科部会での情報共有は概ね達成でき、社会科の意義についての議論も深めることができた。一方で、継続的・具体的な検討という点では課題が残った。</p>	<p>今後は、部会での議論を継続・体系化し、具体的な実践改善につなげられるよう取り組みを深化させたい。</p>	B		A	
<p>日ごろの授業から教科横断的な学び、とりわけSTEAM教育の推進に資する授業実践を行</p>	<p>数学科各員の主体的な研究により、授業改善に向けた実践事例の蓄積が</p>	<p>教科会での交流、校種内・校種間で協働した授業実践、</p>	B		A	

	う。また、ICT 機器に加えて多様な教材・教具を活用し、生徒が“ホンモノ”に触れる体験を通して、数学的な見方や考え方を定着させる学びを展開する。〈数学科〉	図られているが、単元全体を見通した指導計画への反映や、年間を通じた継続的な取り組みとして定着させる点においては、さらなる工夫と改善が求められる。	共同研究の実施と学会発表など、校内にとどまらない多角的な教員間の連携を図っていく。				
	「探究的に学ぶ姿勢」を育むため、理科という枠組みにとらわれずに、社会にも目を向け、広い視野で情報収集し、その情報を活用する実践に取り組む。特に、授業時に生徒がICT機器を主体的に活用する場面を増やし、探究的に情報を活用する下支えとなる力を身につけさせる。〈理科〉	各教科の授業において、探究的な情報活用手段として、生徒のICT端末を活用することができた。特に、単なる情報収集としてのツールではなく、統計学的な情報処理や、動画、画像処理といった、分析ツールとしてICT端末を活用することができた。	ICT端末を活用する際に、どうしても端末依存の生徒が出てくる生徒がおり、本質的に考えさせたいことが考えられなっている生徒が一定数いる。教員側の授業のしかけを工夫し、「探究的に学ぶ姿勢」を育むための課題設定により気を配る必要がある。	A		A	
	音楽科の授業デザインをする上で慣例となっている「～すべき」を問い直す授業実践を蓄積し、音楽教員免許取得を希望する教育実習生の指導に生かすとともに、得た知見を教育研究会等で積極的に発信する。〈音楽科〉	本研究課題をもとに授業実践を蓄積し、第72回教育研究会にて音楽科公開授業をおこなった。「～すべき」に囚われずに教員が自律的に音楽科授業をデザインすることの重要性について、多くの教育関係者とともに多角的・多面的に検討することができた。	得られた知見を、音楽教員免許取得を希望する教育実習生の指導にどのように生かすことができるのかについて、引き続き検討していく。	A		B	
2) 社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向け、中高連携および接続をふまえた取り組みを進める。	(中高)キャリアパスポート(生徒が活動を記録し蓄積するもの)について中1～高3で実施。中高で引き継ぐにあたってどのように連携できるのかを検討する。特に高校生は自分の記録として主体的に取り組むようにLHRなどでの活用を見直し、推薦入試受験の有無に関わらず自分自身を振り返らせる機会を設ける。〈進路指導部〉	(中高)各学年において、キャリアパスポートを記入する時間を設けたり、記入するよう促すことができた。生徒自身が自分自身の学びを振り返り、その学びをキャリアパスポートで蓄積することで、必要な時に自身の学びを振り返ることができた。	(中高)中学校から高校へのキャリアパスポートの引継ぎについては議論できていないので、今後どのように扱うかを決める必要がある。	A		B	

<p>体育大会や学芸会、附高祭などの行事において、生徒が多様な価値観や文化に触れ、互いの違いを認め合い尊重する態度を育成する。また、生徒自身が社会の国際化や多様性について主体的に発信・対話できるような機会を設ける。さらに、中学・高校間での定期的な連携を通じて、接続期における生徒理解の共有と、多様性に対応した実践の充実を図る。＜生徒指導部＞</p>	<p>体育大会や学芸会、附高祭などの行事において、生徒同士が協働する場面を通して、多様な意見や価値観に触れる機会を設けることができた。企画や運営の過程で対話を重ねる中で、互いの立場や考え方を尊重しようとする姿勢が見られ、多様性への理解を深める一助となった。</p> <p>中高連携については、中学生徒指導部長と高校生徒指導部長がこまめに連携を取り、生徒の状況や課題について随時情報共有を行った。</p>	<p>・行事を通じた多様性理解の取組と、中高連携の視点とをより意図的に結び付けることで、単発の対応にとどまらない体系的な実践へと発展させることが今後の課題である。</p> <p>・中学生徒指導部長と高校生徒指導部長との連携は密に行うことができたが、その内容を生徒指導部全体や関係教員へ十分に共有する仕組みは十分とは言えない。組織的な連携へと広げていく体制づくりが必要である。</p>	A		A	
<p>「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等/主体性」の3項目の(小)中高での関連性が明示された授業実践を行う。＜研究部＞</p>	<p>各教科会で中高のカリキュラムを意識し、また教科横断として教科を横断する授業の立案を行った。</p>	<p>国際化や多様化に対応する学力について継続して議論を深める。</p>	A		B	
<p>中高社会科で議論を行ってカリキュラムを検討し、教科内の領域分野の横の連携と、中高の縦の連携を意識した授業を実践し、情報を共有することで、授業の質を向上させる。＜社会科＞</p>	<p>中高社会科での議論を通してカリキュラムを検討し、教科内の領域分野の横の連携や中高の縦の連携を意識した授業を実践することができた。また、その成果や課題を共有することで、授業の質の向上につなげることができ、概ね目標は達成されたといえる。</p>	<p>今後は、横断的・縦断的な連携をより計画的・体系的に位置付け、共有した成果を具体的な指導改善へと確実に反映させる体制づくりを進めていきたい。</p>	A		A	
<p>中高ともに男女共習での実技の実施の機会を増やし、多様化に対応する力の育成を目指すとともに、中高でのスムーズな接続に繋げる。＜保健体育科＞</p>	<p>中高ともに男女共習による実技の機会を増やすことができた。技能差や体力差を踏まえたルールや役割分担を行うことで、互いを尊重しながら協働する姿が見られた。多様な仲間と関わる経験を通して、状況に応じて考え行動する力の育成に一定の成果が見られた。</p>	<p>男女共習の機会は増えたものの、技能差や体力差への配慮が十分でない場面も見られた。特定の生徒に負担が偏ることがないように、ルール設定や活動内容のさらなる工夫が必要である。</p>	A		A	

	校内外の人や多様な教材との関わりを通じたホンモノ体験を計画的に実施する。研究推進日を通して小中高の情報交換を行い、また教育研究会に向けての中高の情報共有や連携を強化する。＜英語科＞	各学年で教科横断を意識した CLIL アプローチによる実践を定期的に行った。また、高校1年では「大阪観考」、高2学年では「京都観考」として実地体験からプレゼンコンテストに繋げる一連の「ホンモノ体験」活動を行った(高)。小学校の研究授業を参観に行き、情報共有を行った(高)。	教育研究会に向けての中高の連携はある程度できたが、計画性や見通し、新たなチャレンジという面では課題が残った。(中・高)	A		B	
3)本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・研究活動での地域との連携を進める。	①教育研究会指導助言講師及び講演講師について、教育研究会テーマ、教科テーマに合う指導者を大阪教育大学へと依頼する。 ②推進日に大阪府下の教員と共に学び合う研修を立案する。 ③研究成果と教育研究会実施報告を集録にまとめる。＜研究部＞	①一部の教科を覗き指導助言を大教大教授に依頼をし、事前および当日の指導をお願いした。②推進③は府内の中高向けにチラシを作成し、校内研修に校外の教員の参加も可能にした。③集録については、教育研究会の実施報告だけでなく、研究部の歩みも掲載した。	大教大との連携と府立や市立との連携の在り方を探る。	A		B	
	教育研究会および普段の授業展示会などにおいて、本校の実践を発信し、他校の実践・提言を踏まえ、カリキュラムマネジメントを行い、よりよいカリキュラムを作成する。＜国語科＞	授業公開後には参観者との意見交流や助言を受ける機会を設け、他校の実践や提言を踏まえながら、授業設計や単元構成、学習活動の意図を振り返ることができた。	今後は他附属や大阪教育大学等との連携についても、授業公開に加えて共同での検討機会や継続的な研究交流を増やし、外部の知見をより計画的に取り入れることで、カリキュラムマネジメントの実効性を高めていきたい。	A		A	
	大阪教育大学数学会に参画し、授業研究会で授業提案を行うなど、数学教育部門および附属学校園算数・数学科との連携を推進する。また、大学内に留まらず、広く府下の公立学校と日々の授業実践について交流の場を設けるなどして、日常的な連携体制を構築する。＜数学科＞	大阪教育大学数学会において多くの参観者に授業実践を公開することができた。また、日常的に本校の授業実践を公開する Google スペース「今日の算数・数学@おおさか」を開設・運営し、広く公立学校の教員、本学数学教育部門の教員との交流を行うことができた。		A	改善点に記載がないため、評価が難しかったです	A	教科に意見を伝えます。

	<p>附属天王寺が従来より大切にしている、「実物・本物を見る指導」の実践を、研究集録や研究会などを通じて発信するとともに、学校ホームページも活用し、その様子を校外に配信する。<理科></p>	<p>従来通りの「実物・本物を見る指導」の実践は、継続して行うことができた。一方で、外部への発信については、各研究会での発信はできたものの、ホームページの有効活用はまだ不十分であった。</p>	<p>「実物・本物を見る指導」の対外的な発信方法として、学校ホームページの有効活用を検討する必要がある。特に、磯観察や地学実習といった理科行事以外の指導について、効果的な実践例として発信をしていく必要がある。</p>	B		A	
	<p>①日々の授業実践や生徒たちが生き生きと芸術活動に取り組む姿をホームページ等で積極的に発信する。 ②音楽科教育の存在意義やよりよい教育実践について検討する上で、他附属の音楽科教員や大学教員との情報共有の場を設定し、連携を強化する。<音楽科></p>	<p>①ホームページでの発信はあまりできなかったが、本校を志望する中学生を対象とした学校説明会にて音楽授業を公開した。 ②附属平野中学校音楽科公開授業の司会をつとめるなど、他附属との連携強化に積極的に取り組んだ。</p>	<p>来年度以降、他附属との連携強化に向けた具体的な取り組みをさらにすすめていく。</p>	A		A	

